うちはサスケだけど、闇堕ちしたくないです・・・・・・・

お

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うちはサスケに転生した主人公が闇堕ちしないように尽力します。

現在プロット練り練りしてます。すみません。

目次

プロローグ ―――― 1

プロローグ

その世界は、他のどの世界より、破滅的で、残酷で、どうしようもない世界だった。

ようやく自分のアパートについた僕は、早く寝ようと急いでシャワーを浴び、着替えて、歯を磨いていた。

ふと本棚を見ると、僕が初めてハマった漫画の「ＮＡＲＵＴＯ」が目についた。　学生時代はこの本を何度も何度も読んでいたなあ。

最近仕事が忙しくなってしまい、趣味に掛けられる時間はほとんどなくなってしまったが、充実した日々を送るのはとても心地よく、将来への希望がある。（ちょっとブラックだが）

明日は待ちに待った日曜日、僕はその日だけは趣味に費やすと決めている。もう一回ＮＡＲＵＴＯを読み直すのも良いかもしれない。

ＮＡＲＵＴＯの登場人物は誰もが格好よく、僕はこの漫画で隠れ中二病を発症させた。　……　思い出したくない。

ベットに潜り込む。明日は5時半に起きる必要がない。疲れた身体を休めて、明日はあの漫画を読もう。
この時はそう思っていた。

気付くと、僕は暗い空間に浮かんでいた。
夢だろうか？　とても疲れていたから滅多に見ない夢を見ているのかもしれない。
身体の感覚はなく、流されるままに空間を漂っていた。
暫くすると、空間全体が揺れ始め、意識が薄れていく。
自分の身体が動き始めたときには、既に意識を手放していた。

起きると、そこは簡素なベットの上だった。
体は重く、目は霞んでいる。

その上、体の中心に何だか奇妙な熱の塊があるように感じられる。
おいおい、今日は日曜日だぞ？　もっとテンションを上げないと。
声を出そうとしたが、呂律が回らずに、「ふへぁ～」という声が出た。
そばには人がいたようで、起きた僕に気付くと、何やら言いながらどこかにいってしまった。
え？　何でいるの？　ここは病院か？　明日の会社行けるかなあ……
その時に見えた、その人の背中に描いてあった卓球ラケットのようなマーク、どこかで見たことがあるような気がする。
眠い。　猛烈に眠い。
人が部屋に走り込んできたときには、もう眠りに落ちていた。

4、5日寝ては起きてを繰り返し、僕は一つの結論に達した。
僕は赤ちゃんだ。（混乱）
しかし、そうとしか思えないのだ。
体は動かない、他の人が妙に大きい、声が出ない。
これはもう確定だ。

更に、この夢が夢でない可能性が出てきた。
皆は夢の中で寝たことはあるか？
僕はない。
あと、授乳時に嫌がって手足をバタバタしたらどこかに当たり、とても痛かった。
自分がどうなってしまったのか不安で、心配だ。
でも、やることもないし、授乳→寝る→起きる→授乳　を繰り返していく。
また、寝ている間に場所が変わったようで、僕は布団に寝かされるようになった。

９０日（昼と夜を数えた）ほど過ぎると、僕はものがよく見えるようになり、あることに気づいてしまった。
あれ？　あのマーク、うちは一族じゃね？

これが夢である可能性が高くなってきた。そうに違いない。そうであってほしい。
認めたくないが、僕はＮＡＲＵＴＯの世界に生まれ直してしまったようだ。
嫌だ。こんな殺伐した世界に居たくない。
元の世界に戻りたい。　仕事したい。

しかも、うちはって滅ぼされるじゃん。子供含めて。うちはイタチに。
詰んだ、終わった。
はは、人生オワタ……

次の日、僕のところに母親らしき人と五歳ぐらいの子供が来た。
彼らは布団の横に座ると、僕を抱き上げた。
「サスケ、貴方のお兄さんですよ」
と、母親が言うと、僕をその男の子に近づけた。
「うん、……　君の兄になるイタチです、よろしく」
その男の子は妙に理知的な挨拶をしてきた。
僕は動けなかった。
あの、イタチだ。　対して、僕はサスケだ。
「どうしたの、サスケ?」
固まったままの僕を心配した母親が何か言ってきたが、聞こえない。
僕は気を失った。

それから何日か経ち、僕が冷静になった頃。

僕は、自身が進むことになる血塗られた道を再確認していた。
うちはサスケは主人公のライバル的存在で、かなりブラックな道を歩む。
幼い頃に兄がうちは一族を滅ぼし、天涯孤独になる。
復讐を誓い、その為だけに里を抜け、大蛇丸の下へ行く。
そのあとも危険な橋を何度もわたり、最終的には主人公の敵になる。
このように、このまま行くと僕も血で血を洗うような所へ行くのだろう。
ダメだ、命がいくらあっても足りない。絶対に死ぬ。
それを回避する為に、今から行動し始めなければ。

もう帰りたい。